

とも売り上げ減少傾向を伝えていました。「出版ニュース」によれば〇七年のわが国新刊出版点数総数に占める児童書の比率は六・三％とのことです。〇八年のそれはどうなったか、今年の発表が気になります。

昨年「日本児童文学」五・六月号の総論（二〇〇七年をふりかえって）の執筆者は前年度の児童書年間新刊総点数が前々年の二〇〇六年より約八〇〇点減だった旨を報告しています。その原因の一つに大手自費出版社の倒産による、自費出版児童書の減少が挙げられました。

出版不況がいわれて久しく、とりわけ売れ行き不振の児童書出版はもうながく初版どまりが普通となっています。〇七年が〇六年より少ないなら〇八年の商業出版点数はもっと少ないだろうと、素人考えで予測していました。ところが、児童文学者協会のさきごろ作成した文学賞対象作品リストによると、出版点数自体は昨年度よりややふえています。文学賞の候補対象は単独の著者の作品に限定されていますから、各出版社のアンソロジー・シリーズなどをふくめると、出版点数総数も微増しているかもしれません。児童書の読者人口激減時代に、新刊書の出版点数増加はたぶんすなおに喜ばしいことなのでしょう。

が、一方、「えっ、なんでこんなものが出版されているの？」と思うほど低劣な作品に出会うたび、この本は（出版実績に応じて毎月一定割合で書籍取次店から版元に支払

われる前金目当ての自転車操業の一環）で出したのかと邪推する悪癖がついているもので、出版点数増加にも、疑いがむくむくわきおこってこないではありません。

（2） 本当に〈子どもは親の背中を見て育つ〉か

今年二〇〇九年一月二日付のロンドン・タイムズに、わたしなどの年齢の者が憂鬱になる記事が載っています。英国の子ども達が一〇歳の誕生日から一歳の誕生日までの一年間の時間をどう過ごしているかという、社会問題特報班の調査記事です。

調査結果では年間八七六〇時間のうち、学校で過ごす九〇〇時間、家族と過ごす一二七七・五時間、テレビやパソコンなどの画面の前で過ごす一九三四・五時間となっています。睡眠・食事・入浴など生活時間を年間四三八〇時間強とすれば、子どもは家族教師友人など生身の人間と一緒にいるより、テレビやインターネットとつきあって過ごしている方が長い計算です。

最近の日本の新聞も、子どもと携帯電話やパソコンによるウェブ・サイトとの関わりについての、親と子ども自身の認識の違いを伝えています。両方の国の調査内容と報道の重点に差異はありますが、よく見れば共通の問題が透けて見えてきます。今や子どもの生活と心を左右しているのは、家庭でも学校でもなく、ハイテク・メディアだという